ニュースによると、韓国政府からはユネスコ大使、経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）大使ら三〇名が参加し、世界文化遺産委員会の委員国であるトルコやクウェートの大使も鑑賞したそうです。同社の関係者はこの上映会について「軍艦島での朝鮮人の強制徴用などを記憶するための処置を求めたユネスコの勧告を日本が履行していないことについて、国際社会の関心を促したかった」と説明しています。

さらにこの映画は二〇一七年八月からは、アメリカとカナダの四〇カ所あまりで上映が始まっており、マレーシアやシンガポールなどの東南アジア諸国でも上映が予定されています。今や日本人を「鬼畜」扱いする映画が、韓国によって事実として世界中に拡散されようとしているのです。

第三章　『軍艦島は地獄島』子供向け本

『軍艦島――恥ずかしい世界文化遺産』

大人向けの映画だけではありません。韓国では絵本などを使って、小さな子供たちにまで「軍艦島」を地獄だったと教えています。その一つは、二〇一六年に韓国で発行された児童用絵本『軍艦島――恥ずかしい世界文化遺産』尹ムニョン作（ウリ教育）です。

『軍艦島――恥ずかしい世界文化遺産』書影

この本には「戦争を引き起こした狂気の沙汰であった日本は、朝鮮半島から幼い少年たちまで強制的に日本に連行したのです。（中略）目的地も告げられずセドリ（主人公の一二歳の少年の名）が連れて行かれた場所は、まさに地獄の『軍艦島』でした。（中略）幼い少年たちは地下一千メートルまで下りて、日本が戦争の資源として使う石炭を掘らなければならなかった

のです。四五度の暑さの中に詰め込まれ、小さな握り飯一個を投げ与えられ、毎日一二時間働かされました」（カッコ内は筆者）とあり、少年たちが鉄格子の檻に無惨に収容されている挿絵もあります。よく見ると鉄格子の檻の外壁にはハングルで「お母さん、会いたいよー」「お腹がすいたよ」「ふるさとに帰りたいよー」という落書きが書いてあります。

奴隷どころかイヌ同様に扱われたセドリたちは、「どっちみち生きては出られない。波にのまれて死んだ方がましだ」と覚悟を決めて仲間と脱走を試みます。しかし結局捕まってしまい、日本兵によって残酷な拷問を受けることになります。死体となった少年の一人は布にまかれて放り出されます。ここでは「日本の監視兵のムチに打たれ、血が噴き出し、肉が千切れ出ました」「夜通し続いた数々の拷問に心身共にボロボロでした」という表現があり、鞭打たれる場面や何人もが逆さ吊りにされた絵まであります。

そして最後にセドリはガス爆発事故で悲惨な死を遂げます。生き残った少年たちの末路も憐れです。彼らは長崎に原爆が落ちた後に、長崎市内の清掃をやらされ、全身に放射能を浴びて徐々に死に絶えるのです。

この本の最後には次のような子供向けの解説がついています。

一、日本は「金をたくさん稼げる機会だ」と韓国の若者を騙して連れていった。それも強制だった。

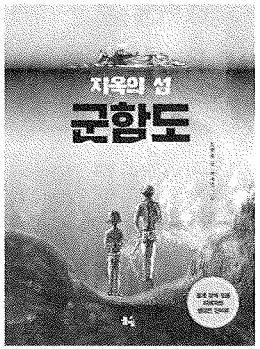
一、脱出を図ったものは波にさらわれるか、発見されれば銃殺となった。（傍線筆者）

一、今では強制労役犠牲者の身元すらわからなくなった。このような日本の態度を知りながら黙っているわけにはいかないだろう。

ここに書かれていることがいかに捏造であるかは、本書で明らかにいたします。しかしこの絵本が、どれだけ韓国の幼い子供たちに日本への恐怖と恨みを植えつけているか計り知れません。恐らく一生トラウマとして彼らの心に残るでしょう。

『地獄の島　軍艦島』

さらに『地獄の島　軍艦島』金ヨンスク著（ブルビット社）という小学校低学年向けの童話が出版され、順調に販売数を伸ばしています。この本の著者は、かつて端島で働いた人に対して行ったインタビューに基づいて書いたと述べており、本文は次のような書き出しで始まっています。



『地獄の島　軍艦島』書影

一九〇〇年から日本は朝鮮に狙いをつけ、一九一〇年に強制的に結んだ韓日併合条約で朝鮮を奪い去った。始めは何が何だかわからなかった。手当たり次第に朝鮮の物を略奪した。米、衣類、石炭、貴金属、木、そして人までも……皆半病人となるか死ぬことでしか帰れなかった。なんと残酷なことだ。

この物語の主人公の名前はグンテ。一九四二年四月、彼の父がグンテにこう語ります。

「日本の奴らはトラックでやってきて道行く人を拉致して引っ張っていった。お前も用心しろ」

グンテはこれを聞いてゾッとします。「自分のような幼い男の子まで徴用されるなんて」と涙を流します。

一九四三年一〇月、グンテの父に「令状」が届き、端島へ「連行」されます。父からは一銭の送金もありません。さらに一九四四年四月にはグンテとその母に「令状」がきて、祖母一人を残したまま強制的に端島へ連れて行かれます。そこで再会した父は、真っ黒に汚れ、骨と皮だけになっていて、最初は誰だか分かりませんでした。

彼らに与えられた住まいは、一番低い階で海水が降りこむじめじめした部屋で、窓には鉄格子があり、周りには監視塔があります。母は食堂の仕事や監督たちの衣類洗濯、公衆浴場の掃除などでこき使われ、グンテのような年端もゆかない子供たちも炭坑内で働かされます。

ツルハシやシャベル、安全帽や作業服も全て有料支給です。作業服といってもふんどし一つしかありません。朝鮮人抗夫たちが坑道の一番先端部の狭い場所で、横になってツルハシで石炭を掘り出し、グンテはこれを集めて運搬車に乗せる仕事をします。灼熱の劣悪な環境で、握り飯二個で一二時間以上働き、しかもノルマを果たすまで地上に出ることは許されません。少しでも休めば、監督が棍棒やツルハシの柄で打ちすえます。グンテもひどく殴られます。隣の坑道では、監督の暴力で重傷を負った朝鮮人が、手当もされず放っておかれ死亡します。死亡しても補償金が出るどころか、会社は葬儀代まで請求します。

グンテは「端島にくれば家もあり、お金も払い、子供は学校に行かせる」と騙した人間を心から呪います。

この物語の最後は、グンテが一人長崎の造船所に移され、そこで脱走します。やがて原爆が落ち、日本が降伏した後に母と再会しますが、父は既に坑内で死亡し、母は重い肺病になっていました。

この本の裏表紙には韓国・誠信女子大の徐敬徳（ソギョンドク）教授による「この本は我が国の子供たちが、歴史の真実を知るための良い道案内人となるだろう」という書評があります。韓国の子供たちはこの本の内容を真実として記憶し、日本人に恨みを抱く「立派な韓国人」に成長するのです。

第四章　「軍艦島」で反日を煽る韓国マスコミ

EBSの偽写真

日本の「Eテレ」にあたる公共系教育テレビのEBSは、二〇一四年一二月に放映した歴史のミニ番組で「戦時下の朝鮮人強制連行」を取り上げました。ところがそこで「酷使される朝鮮人の姿」として使われた写真は、日本の専門家が調査した結果、明治中期に別の炭鉱で撮影されたものだったのです（注1）。

この写真は、CJエンターテインメントがニューヨークのタイムズスクエアにある世界最大の電光掲示板で映画『軍艦島』のプロモーションを行った際にも使われています。また現在もソウル市内のKTX（韓国高速鉄道）発着駅である龍山駅前の広場に建てられた碑（次ページ参照）にこのレリーフが刻まれています。

MBCの「軍艦島」特集

二〇一七年二月八日に、韓国MBCテレビは『イブニングニュース』で「軍艦島」の特集をしました。そこでは「軍艦島」をこのように説明しています。

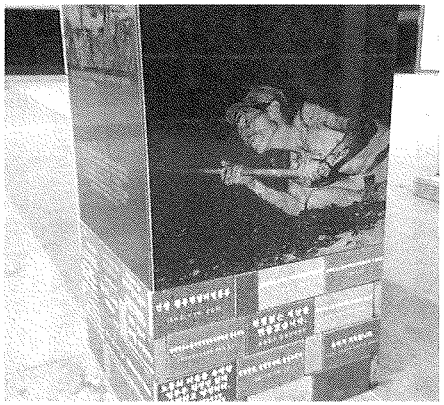
「地下一〇〇〇メートルを超える坑内は、四五度を超える蒸し風呂のようだった」

「炭鉱の中は体を伸ばすことができないほど狭く、有毒ガスが頻繁に噴出していた」

そして『軍艦島――恥ずかしい世界文化遺産』にも登場した「お腹がすいた」「ふるさとに帰りたい」「おかあさんに会いたい」という壁文字が内部の壁から発見されたとも解説しています。

ところがこの番組で「朝鮮人虐待の場面」として使われた数々の写真は、「軍艦島」とは実は何の関係もないものでした。

九州大学の三輪宗弘教授によれば、MBCが「端島で人々が働く姿」として放映したものは、「貝塚炭鉱（福岡県）の露天掘りの様子を写したもの」で



龍山駅前広場の碑には明治時代に別の炭鉱で撮った写真を「酷使される朝鮮人徴用工」として刻んである（筆者撮影）

あり、同じく狭い場所を男性が横になって掘っている写真は、明治中期の筑豊炭鉱の様子を写したものだそうです。炭鉱労働に詳しい、日大名誉教授の田中直樹氏も「機械化が進んだ端島にあんな手掘りは荒唐無稽としか言いようがない」と指摘しています（注2）。

さらに同番組で「鞭打ちは我々の体に蛇のような傷跡を残し」というナレーションのバックに使われた写真は、前述の韓国市民団体がユネスコに提出した写真と同じ、大正一五（一九二六）年に旭川新聞が「道路建設現場での虐待致死事件」を撮影したものでした（注3）。

これらの事実を産経新聞が「質問状」という形でMBCに突きつけたところ、端島とは異なる場所で撮った写真であることは認めたそうです。しかし「たとえ場所は違っていても、朝鮮人たちが強制連行され被害を受けたという脈絡で見れば、歴史の一断面を見せてくれる貴重な資料だ」とMBC側は強弁しており、そこには何の反省もありません（注4）。

事実を確かめもせずに、間違った写真を根拠に自分たちにとって都合の良い主張ばかりを繰り返す韓国のテレビ放送が、いたずらに韓国人の反日感情を煽り立ているのは間違いないでしょう。

聯合ニュースのインタビュー記事

韓国の通信社も負けずに軍艦島関連のニュースをどんどん発信しています。二〇一七年七月二七日付聯合ニュースは、映画『軍艦島』の公開にあたって、徴用によって端島で働いたという元朝鮮人坑夫にインタビューを行い、その結果を次のように伝えています。

一九四三年に徴用されたチェさんは「海に囲まれた端島で三年間『監獄生活』を送った。下着だけで作業した」と語った。三菱が運営した端島炭鉱の労働者の大半は強制連行された朝鮮人または中国人だった。公式の記録によると一九三九年～一九四五年に約八〇〇人の朝鮮人が軍艦島に連行され、一三四人が亡くなった。

端島で働かされた朝鮮人の大部分は坑道の奥深くで石炭を採掘したか、採掘跡が崩れないように埋める作業をした。（中略）軍艦島は四方が海に囲まれているため「監獄島」または「地獄島」とも呼ばれた。脱出を試みる人もいたが、陸地にたどり着く前に溺死するか、捕まったという。

イさんは「端島の隣に小さな島があったが、そこは火葬場と呼ばれた。作業中に、または脱出しようとして死んだ人たちを火葬した」と証言した。

さらにイさんは「端島に八カ月ほどいた後、二〇歳になって日本軍に徴集された。（端島での強制労働が）どれほど過酷だったことか。軍に行くのに『助かった』と思ったほ

どだった」と語った。

日本側は世界文化遺産委員会で「forced to work」と言及し強制連行があったことを認め二〇一七年一二月までに強制徴用の事実を説明する案内板を設置すると約束した。

（中略）期限が五カ月後に迫っているが約束履行の計画は発表されていない。

そして聯合ニュースはこの記事を「日帝強制動員被害者支援財団」の金ヨンボン理事長の次のようなコメントで締めくくっています。

日本は一九六五年の韓日請求権協定により支給した三億ドルで被害者に補償したとの立場だが、当時、そのお金はポスコ（注5）や韓国道路公社のような公営企業に支援されほとんどの被害者と遺族は受け取ることができなかった。（中略）請求権で恩恵を受けた企業が今からでも強制徴用被害者と遺族のために支援に乗り出すべきだ。（後略）

後述しますように、日韓の補償問題は日韓請求権並びに経済協力協定によって最終決着しています。聯合ニュースは、証言者の話をそのまま真実として伝えるばかりでなく、日本政府や企業が責任を果たしていないかのような印象操作を行い、国と国との正式な取り決めを破棄させる方向へ世論をミスリードしているようです。

（注1）『SAPIO』（小学館）平成三〇年三・四月号

（注2）（注4）平成二九年四月一二日付産経新聞朝刊より

（注3）『正論』平成二九年六月号「今度は日本に『強制徴用』の像が……」杉田水脈より

（注5）ポスコ：旧浦項総合製鉄所。日本の資金援助で一九七三年に設立され、新日鉄（現新日鉄住金）の全面的技術援助によって急速に発展し、世界有数の製鉄メーカーに成長した。

第五章　日本発の「軍艦島は地獄」情報

『軍艦島に耳を澄ませば』

実は「軍艦島」は地獄島であったという情報の大部分は、もともと日本から発信されているのです。

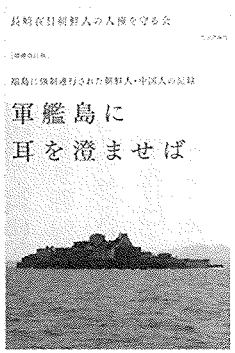
『軍艦島に耳を澄ませば――端島に強制連行された朝鮮人・中国人の記録』（以下『軍艦島に耳を澄ませば』）という一冊の本があります。「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」が平成二三（二〇一一）年に発行したものです。端島に強制連行されたとされる朝鮮人労務者の証言や、炭鉱閉鎖後に端島から見つけだして持ち帰った「火葬埋葬認許証」などを独自に分析した結果が書かれており、まえがきには次のような記述があります。

私たちは「軍艦島」の世界遺産化に反対するものではないが、戦時中の暴虐の歴史を隠蔽してその実現を図ろうとする風潮を容認することはできない。〈近代化産業遺産〉

というとき、日本の近代化が侵略と表裏一体であったことを忘れてはならない。端島はその近代日本の縮図と言っても過言ではない島である。また〈世界遺産〉とは、アウシュビッツがそうであるように、歴史の暗部をも教訓として普遍的な価値とするものであり正しい歴史認識を踏まえないかぎり、〈世界遺産〉への登録はありえないことである。

このようにこの本は「軍艦島」をアウシュビッツと同列に見なしており、「病身になって出たり、死体になって出たりするところだった」「一番坑道の行きあたりが朝鮮人の労働現場、ここでふんどし一枚だけ身に着けて、腹ばいになったり、横になったりして石炭を掘らなければならなかった」など、かつて韓国メディアが取り上げた「証言」なるものも、そのまま事実であるかのように記載しています。日本人自ら日本の過去を徹底糾弾しているのですから、韓国側にとっては何よりの証拠ということになります。映画『軍艦島』や子供向け絵本のベースにもこの本があることは間違いないでしょう。

但し、この本に出てくる証言には事実を踏まえたものも混在しており、これから本書で慎重に検証してまいります。



『軍艦島に耳を澄ませば』書影

『〈写真記録〉筑豊・軍艦島　朝鮮人強制連行、その後』

もう一つ『〈写真記録〉筑豊・軍艦島　朝鮮人強制連行、その後』林えいだい著（弦書房）（以下『筑豊・軍艦島』）があります。

この本は冒頭で「これまでどれだけの日本人が、強制連行された朝鮮人の家族の苦難を考えたであろうか。人間として許せない強制連行問題は、日本帝国主義の植民地政策の延長上にあることを、しかと心に銘記すべきである」と述べており、取り上げている「証言」の中には次のようなものがあります。

『筑豊・軍艦島』書影

「（埋葬について）仲間が事故死して火葬が終わると監視についてきた労務係の命令で遺骨をスコップですくい取り、廃坑に投げ込んだ」

「戦争中は逃亡者を監視するために、在郷軍人たちが銃を持って監視していた」

「中国人が入坑を拒否してハンガーストライキを起こし、炭坑側は軍隊出動を要請した。暴動鎮圧に出動した大村連隊との間で激しい戦闘となったという」

映画『軍艦島』のストーリーを作るにあたって、この『筑豊・軍艦島』もかなり参考情報を提供しているようです。この本にある証言内容についても本書にて検証いたします。

岡まさはる記念長崎平和資料館

長崎市内に「岡まさはる記念長崎平和資料館」なるものがあります。この資料館について平成二九（二〇一七）年六月七日付産経新聞に次のような記事が掲載されています。

事実とかけ離れた内容の報道がでるのは、誤った情報が日本から発信されているからで、その代表的存在が「岡まさはる記念長崎平和資料館」だ。長崎市内の「日本二十六聖人紀念館」から坂を上がったところに資料館はある。海外からの訪問客が後を絶たない。（中略）資料館では、慰安婦を「性的な奴隷」と表現し「動物のように狩り集められてきた若い朝鮮人女性（二〇万ともそれ以上とも言われる）」と説明する。「南京大虐殺」については中国の教科書を引用する形で「殺されたものは三〇万人を下らず」とした。

資料館は七年一〇月に市民団体「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」の代表だった長崎大名誉教授の高實康稔（たかざねやすのり）が、平和活動家で牧師だった岡正治の遺志を継いで仲間と開設した。（中略）四月に死亡した高實について、地元の長崎新聞は一面で訃報を伝え、社会面で「加害の歴史　実態解明に尽力」の見出しで評伝を掲載した。

二七年一〇月、高實は資料館を訪問した韓国人学生に「朝鮮人はいつもじめじめしている軍艦島の劣悪な住居環境の中に住まわされていた」と話した。資料館は端島をこう説明している。「陸地から孤立されたこの島で、強制連行者たちは想像を超える劣悪な労働環境のなかで、残酷な暴力をふるわれながら死闘の日々を送った。彼らは端島を『地獄島』と呼んだ」

高實の活動を韓国も利用した。韓国国会は二〇〇四（平成一六）年三月、「日帝強占下強制動員被害者真相究明等に関する特別法」を制定し、「真相究明活動」のための委員会を立ち上げた。その結果をまとめた報告書が二八年六月に発表され、高實と資料館の名前は、資料収集と現場調査を支援する「海外諮問委員」として明記された。（中略）

高實は北朝鮮との交流にも取り組んだ。二八年一一月には、北朝鮮「金剛山歌劇団」長崎講演の実行委員長も務めた。（中略）高實は、昭和四六年に韓国の陸軍保安司令部が「北朝鮮のスパイ」として逮捕し、政治犯として投獄された立命館大学特任教授、徐（ソ）勝（スン）とも繋がる。高實は投獄された徐勝と、彼の弟の救出を目指す「徐兄弟を救う会」の会員でもあった。（後略）

この資料館は私も訪問しましたが、強烈な反日イデオロギーの拠点のように思えて、戦慄さえ覚えました。外国人の来訪者も多く、日本の中学生や高校生も日教組の先生に引率されて、たびたび見学にきているようです。こうして日本国内から「日本人の蛮行」が際限なく発信されているのです。